伝え合い　高め合い
学びを生かすことのできる
子どもの姿を目指して

教科・領域等研究

国語科

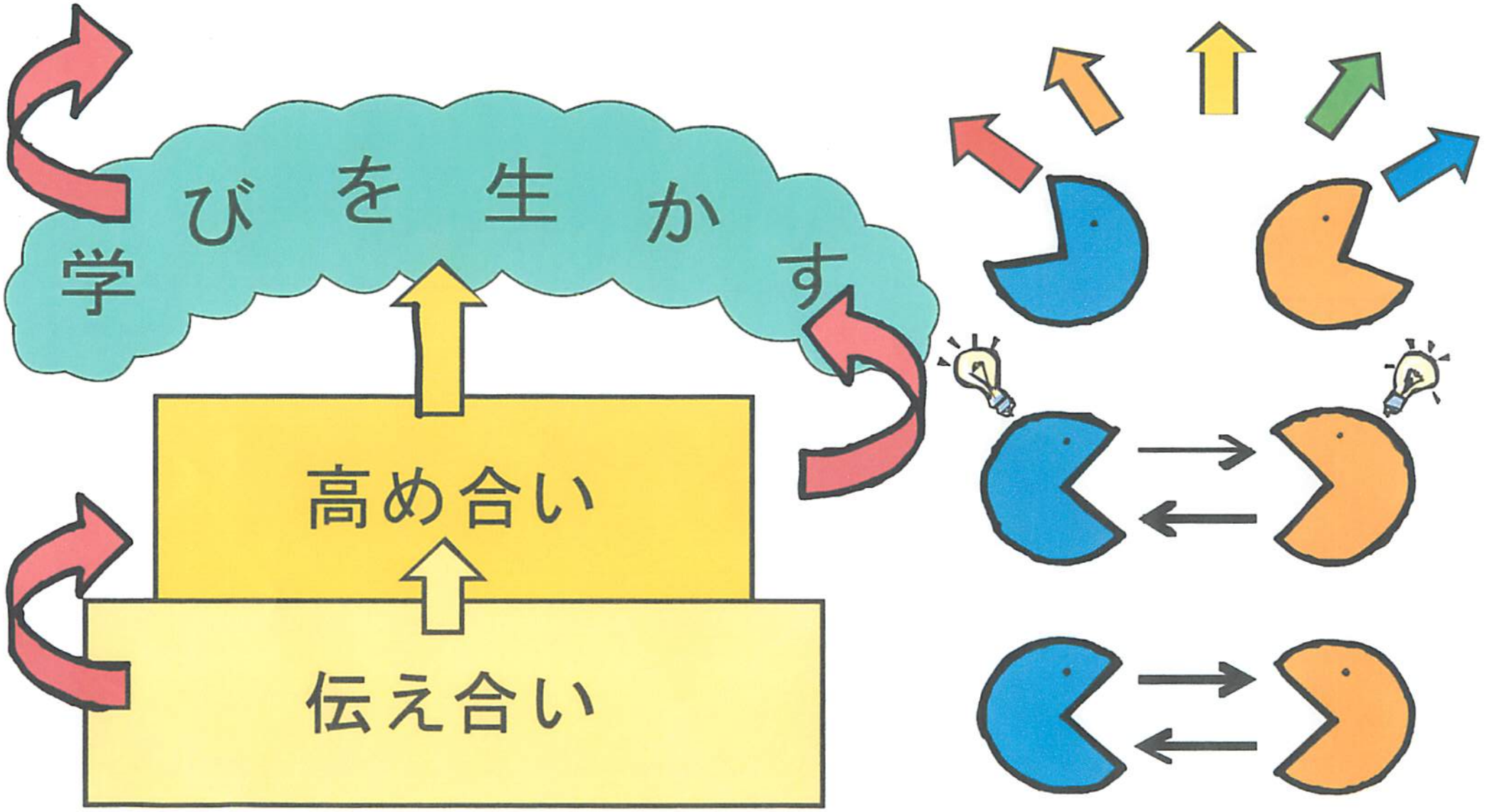
小・中9年間を見通した言語活動の取組み

藤沢市教育文化センター　2012.3

国語科研究部会　研究テーマ

伝え合い　高め合い　学びを生かすことのできる子どもの姿を目指して

～小中9年間を見通した言語活動の取り組み～



はじめに

2008年（平成20年）3月新学習指導要領が告示され、小学校では平成23年度から、中学校では平成24年度から全面実施となっています。

改訂の趣旨は、学習指導要領総則「教育課程編成の一般方針」にあるように、「児童（生徒）の発達の段階を考慮して、児童(生徒）の言語活動を充実する」ことと明記されています。また、「指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」では、「言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童（生徒）の言語活動を充実すること」としています。

この背景には、知識基盤社会の到来や、グローバル化の進展など、急速な社会の変化や OECD 生徒の学習到達度調査（PISA）における国際比較、全国学力・学習状況調査の結果分析があります。このような状況から、中央教育審議会の平成20年の答申では、「国語をはじめとする言語は、知的活動（論理や思考）だけでなく、コミュニケーションや感性･情緒の基盤でもある。このため、国語科において、これらの言語に果たす役割に応じ、的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して伝え合う能力を育成することや、我が国の言語文化に触れて感性や情緒をはぐくむことを重視する。」としています。

このような状況の中で、教育文化センター教科･領域等研究、国語科研究部会が、2009年（平成21年）4月から、新しい研究員をお迎えして始まりました。1年次は、互いの授業を見合い、課題を確認していきました。その結果、研究テーマを、

伝え合い　高め合い　学びを生かすことのできる子どもの姿を目指して
～小中9年間を見通した言語活動の取り組み～

と決定しました。2年次からは、テーマを設け市内の学校の先生方に授業公開を行い、研究を深めてきました。

月に一度の研究部会では、小学校3名、中学校2名の研究員は、日頃の授業の中での思いや願い、また、悩みなどを共有し合いながら、目指す子ども像、授業像などを話し合ってきました。この報告書は、時代の要求にどう応えていくか、教室の一人ひとりの子どもにどのようにして言葉の力を育てていくか、その実践をまとめたものです。是非、ご一読いただき、日頃の授業に役だてていただきますようお願いいたします。研究員の皆様には、この3年間研究にご尽力いただきありがとうございました。

最後になりましたが、3年間にわたり国語科研究部会の講師を務めていただき、貴重なご指導をいただきました横浜国立大学の青山浩之先生には、心よりお礼申し上げます。

２０１２年（平成24年）３月

藤沢市教育文化センター長　泉　在道

CONTENTS

Contents

Contents

はじめに

研究の概要 … 2

国語科における言語活動の充実　青山 浩之 … 5

実践報告Ⅰ　○ 本と友だちになろう「スイミー」　福井 康子 … 19

実践報告Ⅱ　○ 人と「もの」との付き合い方　鹿間 順子 … 33

実践報告Ⅲ　○ 「失敗」をめぐって　坂部 百代 …47

実践報告Ⅳ　○ 体験を伝え合おう　栗原 明美 …61

実践報告Ⅴ　○ 豊かな言葉「俳句の可能性」　大石 翔 …71

おわりに

研究の概要

テーマについて

2009 年 4 月、横浜国立大学准教授青山浩之先生を講師に迎え国語部会の研究が始まった。

この部会は、小学校と中学校との教員が会する場であり、それぞれの校種での課題やねらいも異なる。そのことを踏まえ、互いに児童生徒の発達段階を考え、その段階に見合った国語の力とはどういうものなのか、日々の授業を行う中で考えていくことは、研究員の大きな財産になるものと考えられる。

1 年目は、お互いの授業を見合いながら、どのようなテーマをもとに研究を進めていくかを話し合ってきた。

一方、2008 年 3 月には、学習指導要領が改訂され、全教科にわたって言語活動の充実が求められる中で、各研究員の課題として、子どもたちの実態や様子から次のようなことが挙げられた。

・自分の意見は言いたいが、人の意見は聞けない
・一部生徒と教師の一問一答で授業が進んでしまう
・発表をしたがらない
・人に見せるのを恥ずかしがる
・話し合いが言い放しで終わってしまい、深まらない

これらの課題と、児童生徒に身に付けたい国語の力、また研究員各自の課題を踏まえ、研究テーマを

「伝え合い　高め合い　学びを生かすことのできる子どもの姿を目指して」

～小中 9 年間を見通した言語活動の取り組み～

と決定した。

言葉は、他者があって発せられるものが多い。また、発することによって自分の考えを理解できると考えられる。また、他者とのやりとりから、それらをより確かなものへと導くことができる。

また、他者から批正されたり、自分とは異なった考えを知ったりすることにより、自分の考えを深めたり、改めたりすることができるものである。

「合い」ということに力点を置く研究を進めることにより、一人ひとりの子どもたちに、言葉の力を身に付けさせ、個の言葉の力の育成のみならず、集団として学ぶことのすばらしさを日々の教室で味わわせたい。

そのような実践を進めることが、テーマに迫っていけるものと考えた。

研究経過

研究当初の 1 年間で研究員による授業を研究員と講師の先生と共に行ってきた。お互いの授業を見学、あるいは、授業研究することで、実践力をつけるための参考とした。また、子どもの発達段階を理解する一助とし、研究員の教室の子どもにつける学力とはいったいどのようなものか、発達段階を考慮した国語の学力とはどういうものかを研究してきた。

初年度に行った授業研究

2009 年 9 月 11 日
大庭中 3 年生　授業者　大石　翔
「インタビュアーになろう」

2009 年 10 月 29 日
鵠洋小学校 2 年生　授業者　鹿間　順子
「おてがみ」～がまがえるくんへの手紙

2009 年 11 月 26 日
鵠南小学校 1 年生　授業者　坂部　百代
書写（硬筆）指導～とめ・はね・はらい～

2009 年 12 月 10 日
滝の沢小学校 1 年生　授業者　福井　康子
「ふゆのことばあつめ」とカルタづくり

2010 年 2 月 18 日
善行中学校 1 年　授業者　栗原　明美
「少年の日の思い出」
～クライマックスはどこ～

これらの授業は、青山先生のご指導を受け

ながら行われたものである。普段の授業の延長であり、そこに授業者の思いや願いを互いに共有し、同時にテーマ設定に向けての土台・基礎となるものであった。

2 年目からは、テーマに基づいた研究セミナー実施に向けて、指導案の検討を繰り返してきた。そして、多くの先生方の参加を得ながら、研究員のテーマに迫る実践に対して、問題提起や示唆を得ることができた。

以下は、2 年目に行われた、研究セミナーである。

2010 年 7 月 1 日　授業研究セミナーⅠ
滝の沢小学校 2 年生　授業者　福井　康子
「本と友達になろう『スイミー』」

2010 年 9 月 24 日　授業研究セミナーⅡ
鵠洋小学校 5 年生　授業者　鹿間　順子
「人と『もの』との付き合い方」
（ポスターセッション）

2010 年 11 月 11 日　授業研究セミナーⅢ
大清水小学校 5 年生　授業者　坂部　百代
「『失敗』をめぐって～自分の心と向き合い、高め合える話し合いをしてみよう～」

2011 年 2 月 17 日　授業研究セミナーⅣ
善行中学校 1 年生　授業者　栗原　明美
「体験を伝え合おう」

3 年目に入り、セミナーに向けての指導案検討･実施と共に､紀要原稿の執筆にあたった。

2011 年 6 月 30 日　授業研究セミナーⅤ
大庭中学校 3 年生　授業者　大石　翔
「豊かな言葉『俳句の可能性』」

また、講師の青山浩之先生には、改訂学習指導要領の背景、そして、それを受けて今後の学校に求められる授業のあり方について国語のみならず全ての教科について幅広い助言を受けた。

2011 年 8 月 5 日　教育課程研修講座
青山浩之准教授
「国語科における言語活動の充実」

まとめにかえて

校種間を超えての研究と、授業そのものに視点を当てていることが、教育文化センターの研究の特長と言える。異なる校種の授業をみることは日常的には滅多にないことである。このことは、自分の授業を振り返る絶好の機会になっていることは事実である。

テーマに迫るために、各研究員が工夫し実践してきた背景には、子どもを前面に立たせたい、主役にさせたいという願いがあった。そして、子ども自身の考えや思いを言葉として表出させたいという思いがあった。

3 年間の研究を通して工夫してきたことは以下のようなものである。

・話し合う場面で、教師の問いではなく子ども自身の問いを基にして全体の課題にすること。
・完成したものを最後に発表するのではなく、中間発表することにより、他者からのコメントをもらい、より確かな表現に結びつけられること。
・互いの作品を評価し合うことで、他者の見方・感じ方に触れるとともに、自分の伝えたい事柄を推敲する場にもなること。
・安心して伝え合える環境づくりに努めること。そのために、相手の話を聞く態度と、受け入れ尊重する態度の育成を意識し、指導を繰り返すこと。

研究員の担当する学年の持ち上がりが難しい現状の中で、解決できなかった課題もあるし、また新たな課題もできてくることもある。研究期間の 3 年間を見通した実践を積み重ねることは現実的には難しい。特に小学校では、担当学年が順次持ち上がるということはかなり難しい実態がある。

したがって、それを踏まえ、単年度での成果を視野に入れて研究をまとめた。

また、次のページに示した表は、9 年間を見通した、授業の中で身に付けさせたい言葉の力を表したものである。小学校高学年と中学校 1 学年を発達段階として同程度ととらえ構成したものである。参考にしていただければと思う。

9年間を通して身に付けさせたい国語の力とその活動

	小1・2	小3・4	小5・6・中1	中2・3
書くこと	経験や想像したことについて書く	調べたことについて書く	考えたことについて書く	社会生活について書く
	順序を考えて書く	相手や目的に応じて書く	目的や意図に応じて書く	構成や展開を考えて書く
	進んで書く態度を育てる	段落相互の関係を考えて書く	効果を考えて書く	書くことで、考えを広げたり深めたりする
		工夫して文章を書く	書くことで考えをまとめる	
	入門期【文章を書くことの基礎】	伝えるために書く	考えをまとめるために書く	考えを広げたり深めたりする
言語活動	経験や想像したことについて、簡単な文章を書く	詩や物語を書く	短歌・俳句・物語・随筆などを書く	立場を決めて自分の意見を述べる文章を書く
	メモや文章に書く	調べたことを報告する文章を書いたり、新聞に表す	課題を調べ、意見や報告を文章にまとめる	批評する文章を書く
	伝えたいことを手紙に書く	資料を使う	より多くの人に伝える文章を書く（説明・記録・行事案内など）	目的に応じて様々な文章を集め、編集する
		目的に応じて手紙を書く（礼状など）		

	小1・2	小3・4	小5・6・中1	中2・3
読むこと	順序や場面の様子に気付き、想像しながら読む	内容の中心や段落相互の関係をとらえながら読む	内容・要旨をとらえながら読む	内容・展開・表現の仕方に注意して読む
	楽しんで読書をする	幅広く読書をする	読書を通じて考えを広げたり深めたりする	情報を集め、活用する
			ものの見方を広げる	読書を生活に役立て、自己を向上させようとする
	自分の感想を持つ	文章を書いた人を意識する	相手の言いたいことを読み取る	相手と自分の考えの違いを明確に読み取る
言語活動	本を読む	感想を述べ合う	伝記などを読んで、生き方を考える	感想を述べ合う
	読み聞かせを聞いたり物語を演じたりする	記録・報告や、図鑑・事典を活用する	新聞を読む	読んだ文に対する自分の考えを述べる
	感想を書く	記録や報告の文章を読んでまとめた文章を読みあう	本の推薦文を書く	様々な情報を比較する
	好きな本を紹介する	紹介したい本の説明をする	音読・朗読をする	物語や小説の批評をする
		読んだ本に関連したほかの本を読む	引用する	本の読み方選び方を考える

	小1・2	小3・4	小5・6・中1	中2・3
聞くこと	重要なことを落とさないように聞く	話の中心を意識して聞く	質問しながら聞く	内容を評価しながら聞く
	話の中で興味を持ったところを意識する	話の内容について疑問や感想を持つ	話の内容から、自分の考えとの共通点や相違点を整理する	聞き取った内容から自分のものの見方や考え方を深める
	話を聞き取る	話の中から要点を捉える	相手の意図を意識	自他の考えを比較・評価し、再考する材料にする

受動的 ―――――――――――――――――――――――――――――――――――――→ 能動的

	小1・2	小3・4	小5・6・中1	中2・3
話すこと	身近なことや経験したことを順序立てて話す	要点を整理し、関心のあることを筋道を立てて話す	情報や知識を収集し、自分の意見、考えと関連付けて話す	経験や知識を整理して考えをまとめ、状況や相手に応じ説得力を持たせて話す
	丁寧な言葉や声の大きさ、速さに注意してはっきりと話す	適切な言葉づかいで抑揚をつけて、相手を見ながら話す	理由を添えるなど明確に伝わるように工夫しながら場に応じた言葉で話す	敬語を適切に使い、社会生活の中から話題を決めて話す
	事実や自分のことを話す	話の中心を明確に話す	自分の意見・考えを伝える	相手と自分の立場を踏まえて話す
言語活動	身近な人の伝えたいことを聞く	出来事の説明や報告を聞く	資料など提示されたものを見ながら聞く	スピーチや発表を聞いて自分の表現の参考にする
	昔話や神話、伝承の読み聞かせを聞く	図表や絵、写真を見て読み取ったことをもとに話す	日常生活の話題を調べたりまとめたりして話す	社会生活の話題について自分の立場や考えを整理して話す
	事物の説明や報告をする	報告や説明を聞いて意見を持	説明、報告、紹介の中で効果的に資料を提示する	
	知らせたいことについて紹介する			

おわりに

言葉は自分を拓くとともに他者を理解し、豊かな人間関係づくりを築く基本となるものです。

この部会では、人間関係づくりの基礎・基本となる言葉をひとりの子どもに身に付けさせたいという研究員全員の願いをもとに本紀要をまとめてきました。小さな一歩ではありますが、日々の授業の中で今後も追求していきたいと思います。

青山先生には、懇切丁寧なご指導をいただきました。部会ごとに、研究員の素朴な質問にも丁寧な対応をいただきました。また、授業公開であるセミナーでも示唆に富むご指摘ご助言をいただきました。

3年間のご指導に深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、部会研究授業、授業研究セミナーでは研究員所属校の校長先生を始め教職員の皆様に大変お世話になりました。ここに厚くお礼申し上げます。

藤沢市教育文化センター国語科研究部会

研究員	福井　康子	（滝の沢小学校）
	鹿間　順子	（鵠洋小学校）
	坂部　百代	（大清水小学校）
	栗原　明美	（善行中学校）
	大石　　翔	（大庭中学校）
講　師	青山　浩之	（横浜国立大学准教授）
担　当	新井　泰春　　片山美奈子	（川越　信彰）

教科・領域等研究　国語科

伝え合い　高め合い　学びを生かすことのできる子どもの姿を目指して
～小中9年間を見通した「言語活動」の取り組み～

2012年3月発行
編集発行　藤沢市教育文化センター
〒251-0002　神奈川県藤沢市大鋸1407-1
TEL　0466-50-8300　FAX　0466-82-4764
E-Mail：kyobun-c@city.fujisawa.kanagawa.jp
URL：http:www.city.fujisawa.kanagawa.jp/kyobun-c/
印刷所